

田辺福麻呂歌集「哀弟死去作歌」の枕詞

——「はふ蔦の」「天雲の」考——

森 下 成 海

はじめに

哀弟死去作歌一首〈并短歌〉

父母賀 成乃任尔 箸向 弟乃命者 朝露乃 銷易杵寿 神之共 荒競不勝而 葦原乃 水穂之国尔 家無哉 又
 還不来 遠津国 黄泉乃界丹 蔓都多乃 各々向々 天雲乃 別石往者 闇夜成 思迷匍匐 所射十六乃 意矣痛
 葦垣之 思乱而 春鳥能 啼耳鳴乍 味沢相 宵昼不知 蜻蜓火之 心所燎管 悲悽別焉

反歌

別而裳 復毛可遭 所念者 心乱 吾恋目八方 へ一云、意尽而
 蘆櫓木笑 荒山中尔 送置而 還良布見者 情苦喪

右七首、田辺福麻呂之歌集出

(『萬葉集』 9 一八〇四—一八〇六・挽歌)⁽²⁾

『萬葉集』巻九に、「田辺福麻呂の歌集に出づ」(「田辺福麻呂の歌集」以下、「福麻呂歌集」と左注にある挽歌のうちの一つである。題詞および、長歌が「父母が成しのまにまに 箸向かふ弟の命は 朝露の消やすき命」で始まることからわかるように、弟の死を哀しんで作られた挽歌である。

作者である田辺福麻呂⁽³⁾は、詳細な経歴の不明な人物であるが、『萬葉集』中の題詞や作歌状況等から、多少その経歴を知ることができる。

『萬葉集』巻十八巻頭の題詞によれば、福麻呂は、天平二十(七四八)年三月、越中国を訪れ、当時越中守であった大伴家持と交流している。同題詞に、「左大臣橘家之使者、造酒司令史田辺福麻呂」とあることから、左大臣・橘諸兄の使者であったこと⁽⁴⁾、「造酒司令史」であったことがわかる。官位令における造酒令史の官位相当は大初位上であることから、福麻呂は下級官人であったと推察される。

福麻呂と交流のあった大伴家持は、言うまでもなく萬葉第四期(天平六年以降)⁽⁵⁾を代表する歌人である。同時代において、家持に次いで多くの歌が残るのが福麻呂であり、『萬葉集』に四十四首が採録されている⁽⁷⁾。福麻呂もまた、萬葉第四期を代表する歌人の一人である。

福麻呂の歌の特徴については、『萬葉集歌人事典』⁽⁸⁾に、

一般に福麻呂作には、枕詞・対句表現の多用、また先行歌人の語句の類似性といった面がみられる。そのため平明で纏まっではいるが、他方力強さに欠け、福麻呂独自の新しい境地を開くまでにはいたっていない。

(項担当…並木宏衛)

とあるように、枕詞や対句を多く用いること、先行歌人の語句から強い影響を受けていることがよく知られている。このような特徴は否定的に評価されることも多い。

一方で、福麻呂歌集歌に見られる特徴的な用字や、枕詞や対句といった表現面の特色などから、福麻呂の作品を見直す研究もある。

これまで、福麻呂の作品では、特に卷六の宮廷歌群が注目されてきた。近年では、卷九の菟原処女の伝説歌である「過葦屋処女墓時作歌」(一八〇一―一八〇三)に関する研究も多い。⁽¹¹⁾

本稿は、これまでもあまり注目されて来なかった「哀弟死去作歌」⁽¹²⁾を対象とする。

「哀弟死去作歌」長歌(以下、「当該歌」)は、後半部の五音句に連続して枕詞が用いられている。従来、注釈書では、当該歌の枕詞の連続は、歌を飾るための装飾機能を重視したものであると評価される場合が多く、これらの枕詞が歌意に深く関わる可能性は十分に検討されてこなかった。

本稿では、特に、第十五・十六句「はふ薦の己が向き向き」、続く第十七・十八句「天雲の別れし行けば」を検討する。当該歌に用いられた枕詞から、福麻呂の作歌の工夫を探ってみたい。

一、「哀弟死去作歌」長歌の枕詞について

(1) 当該歌に対する諸注の評価

まず、当該歌に対する注釈書の評価を見てみよう。

当該歌は、歌の後半部に枕詞が連続するという特徴がある。⁽¹³⁾ 該当の箇所を掲出する。諸注釈書が枕詞と判断する五音句を括弧に入れて示した。

……(遠津国) 黄泉乃界丹 (蔓都多乃) 各々向々 (天雲乃) 別石往者 (闇夜成) 思迷匍匐 (所射十六乃) 意矣

痛いたみ（葦垣あしかぎの之）思乱おもひだれて而（春鳥はるとり能）啼耳ねのみなきつ鳴乍（味沢あぢさはふ相）宵昼よるひる不知（蜻蛉かぎろひ火之）心所こころ燎管もえつつ 悲悽なげき別焉わかれぬ

この枕詞の多用の表現手法としての是非が、当該歌に対する諸注の評価を分けてきた。

当該歌を最も否定的に評価したのは『私注』⁽¹⁾である。

福麿の作であるが、序、枕詞の使用徒らに繁多で、集中悪作の好例であらう。或は他人の爲の代作で、感動のないのに無理に作つたものであるかも知れぬ。

『私注』に限らず、当該歌の枕詞には否定的な見解が多い。（土屋文明『私注』、一九五一年 傍線は稿者による、以下同。）

枕詞を非常に多く用ゐてゐる點注目される。枕詞によつて調子を整へ趣を出してゐるのであるが、少し煩はしい感じもするのではあるまいか。（川田順『總釋』、一九三六年）

悼意を陳べた末章は、通念的の文字の羅列だが、その疊々層々の排叙に、縷々反復なほ盡きぬ悲痛の情意が認められる。但枕詞や序詞の連用で平凡を糊塗した嫌があり、同意同語の重複もあり、繁縟と錯雜との弊にたへぬ。

（金子元臣『金子評釋』、一九四五年）
枕詞の使用が稍多過ぎて煩はしい感がないでもないが、哀韻は咽ぶが如く流れてゐる。

（佐佐木信綱『佐佐木評釋』、一九五〇年）
後半、連續して九個の枕詞を使用したのは、感情表出の妨げになるばかりで、悪効果を來している。

（武田祐吉『全註釋』、一九五六年）
『總釋』は、枕詞に調子を整える機能があることを認めながら、「少し煩はしい感じもする」と評する。『金子評釋』は、「縷々反復なほ盡きぬ悲痛の情意が認められる」と評価するが、枕詞を使うことで歌の「平凡を糊塗した嫌」があり、

同じような意味や同じような語が繰り返されるために、「繁縟と錯雑との弊にたへぬ」とする。『佐佐木評釋』は、歌に流れる哀韻を評価しながらも、『總釋』と同じく「煩はしい」という語で枕詞の多用に疑問を呈している。『全註釋』は、枕詞を連続して使うことは、「感情表出の妨げになるばかり」であると言う。

次に挙げる『集成』と『釋注』は、枕詞の多用は、悲しみを表現するための工夫であると考え、意義を見出している。枕詞を多用することで、とぎれとぎれに悲しみを述べる趣きをもつ歌。

（青木生子・井手至・伊藤博・清水克彦・橋本四郎『集成』、一九七八年）
いささか奇異で一見興ざめの感じを与える。が、作者としてはとぎれとぎれに痛恨を訴えようとあえて企図した工夫であるらしい。
（伊藤博『釋注』、一九九六年）

「とぎれとぎれ」は、枕詞を用いることで五音句毎に歌の意味が途切れるということを指すのだろう。このように、枕詞の多用に対して否定的な注釈書もあれば、好意的な注釈書もある。しかし、いずれの立場においても、当該歌の枕詞を装飾を重視した修辭として捉えるに留まる。

一方で、『窪田評釋』と『全注』は、『集成』や『釋注』とは異なる視点で、枕詞の連続を好意的に評価している。第二段「遠つ國黄泉の界」以下は、死者として埋葬するに際しての心を、出來得る限り鄭重な語をもつて述べたものである。五七二句をつらねる毎に、その一句には必ず枕詞を据えて、九回まで繰り返してゐる。意識し用意してのことと見えるが、これは他に例の見えないものである。一首の歌として見て、深い悲哀を湛へながらも、同時に華麗な趣を持ったもので、この時代には著しく少なくなつてゐる挽歌の代表的なものである。

（窪田空穂『窪田評釋』、一九五〇年）
『窪田評釋』は、枕詞の連続を「深い悲哀を湛へながらも、同時に華麗な趣を持ったもの」であると評価している。

そして、『全注』は、当該歌の枕詞の用法の独自性に言及する。

たしかにこの長歌における枕詞の多用は繁多に過ぎると見られるが、それぞれの枕詞は決して固定した慣用的な用法で惰性的に使われているのではない。「遠つ国」「闇夜なす」は万葉集中の孤例であり、福麻呂が自ら考案した枕詞である可能性が高い。「延ふ鳶の」「味さはふ」は例の多いものであるが、この作品では独特のかかり方をしてゐるし、「天雲の」「春鳥の」も他例と少々異なつた使い方をしている。「かぎろひの」も枕詞として用いたのは福麻呂のみであつて、しかも他の一例（6・10四七）は「春」にかかるのに対して、ここでは心理的表現の「心燃ゆ」にかけてゐる。また、「射ゆ鹿の」は日本書紀歌謡の古い枕詞を平易なかり方に変えて利用したものだらう。枕詞はそれぞれに工夫されて使われていると言つてよい。その工夫がすべて成功しているとは必ずしも言えないが、窪田評釈が説くように一首に華麗な趣を添え、作者の死者に対する鄭重な心持ちは十分に表現されたとと言えるだらう。……亡き弟への哀惜の思いが深ければ深いほど作者は哀悼の言葉飾りたかつたのであらう。激痛にも似た異性への愛とは別の、しかししみじみとした肉親への愛が、これらの枕詞が紡ぎ出すイメージと調べによつて表現されていると思われる。

（金井清一『全注』、二〇〇三年）

『全注』は、当該歌の枕詞が、他とは異なる独自のかかり方をしてゐることに注目する。枕詞が繁多であるとも評すが、「それぞれの枕詞は決して固定した用法で惰性的に使われているのではない」と述べ、他の萬葉歌や歌謡における用法と、当該歌の枕詞の用法とを比較して、作者福麻呂の工夫を見出している。この枕詞の工夫について、『窪田評釈』の「華麗な趣」という捉え方を引用して、「亡き弟への哀惜の思いが深ければ深いほど作者は哀悼の言葉を飾りたかつたのであらう」と述べる。そして、「しみじみとした肉親への愛が、これらの枕詞が紡ぎ出すイメージと調べによつて表現されていると思われる」の一文に見えるように、枕詞によつて紡ぎ出される「イメージ」があると言う。

(2) 『萬葉集』の「枕詞」

ここで今一度、枕詞の一般的な定義を確認しておく。

文全体の主想と直接意味の関連がなく、ただ軽妙な意味の連想や音の類縁性から生ずる脹み・情緒を、その連なる句や語（被枕詞）に付与する五音節以下の語句。

（『和歌大辞典』¹⁵ 項担当…滝沢貞夫）

一般には、傍線のように「文全体の主想と直接意味の関連がなく」、「五音節以下」の詞句が「枕詞」であると判断されよう。前節で確認したように、当該歌の枕詞は、最も一般的な枕詞の認識、すなわち歌意に反映させる必要がない修辭と考えられ、心情表現には役に立たない技巧と捉えられる場合も多い。

しかし一方で、福麻呂の当該歌には否定的な諸注も、人麻呂の石見相聞歌の第二群長歌（2一三五）の枕詞の多さには一定の理解を示している。当該歌を「序、枕詞の使用徒らに繁多で、集中悪作の好例であらう」と評した『私注』も、「枕詞が多いということは必しも末梢的技巧とは言へないであらうが、前の歌（稿者注…第一群長歌、2一三一）の次に此の歌に來ると少しくその煩に堪へない氣もする」と述べ、枕詞が多いということは必ずしも悪いことではないと前置きする。

前節で見た『全注』の指摘のように、当該歌の枕詞は、それ自体は他に例が存在するものであっても、後続の七音句に他とは異なる用法が認められる。たとえば、本稿で取り上げる「はふ薦の―己が向き向き」は、他の萬葉歌ではすべて「はふ薦の―別れ」であり、当該歌のみが例外である。これは明らかに、「はふ薦の―別れ」という先例を承知の上で、作者が言葉を変えたものである。すでに存在する形式をそのまま借りて歌に取り入れることを避ける姿勢が見える。

それぞれの枕詞がどのような意味を持つのか、作者は解釈を持っていて、当該歌に相応しい形で用いたのではないか。本稿では、当該歌の枕詞を、ただ装飾性を重視した歌意に反映させる必要がない修辞ではなく、歌意に関わるものとして読み取を試みる。

二、「蔓都多乃^{はふつたの} 各々向々^{おのがむきむき}」について

(1) 「各々向々」の訓

以下、当該歌の第十五・十六句「蔓都多乃^{はふつたの} 各々向々^{おのがむきむき}」と第十七・十八句「天雲乃^{あまくもの} 別石往者^{わかれしゆけは}」について詳細に検討する。

まず、第十五・十六句「蔓都多乃 各々向々」について検討する。

七音句の「各々向々」は訓に諸説あるため、はじめに訓を定めておきたい。⁽¹⁶⁾「各々向々」は、多くの注釈書が「おのがむきむき」という訓を採るが、異説がないわけではない。以下は、「おのがむきむき」、「おのおのむきむき」、「おのおのもの」の諸訓案と、それを採る注釈書の一覧である。

おのがむきむき 『代匠記』初稿本・精撰本、『拾穂抄』、『萬葉考』、『略解』、『井上新考』、『全釋』、『金子評釋』、

『佐佐木評釋』、『大系』、『全註釋』、『私注』、『注釋』、『集成』、『全訳注』、『窪田評釋』、『新編全集』、『釋注』、『和歌文学大系』、『全注』、『全歌講義』、『全解』、『岩波文庫』

おのおのむきむき 『代匠記』精撰本（「おのがむきむき」以外の一案として）

おのおのもの 『古義』、『總釋』

「おのおのも」と訓んだ『古義』は、次のように言う。

各各向^{オノオノ}向^{オノ}は、本居氏は、オノオノムキムキとよめり、今按^アに、これはオノモオノモと六言に訓べきか、稱徳天皇^ノ紀^ノ宣命^ノの中に、於^{オノ}乃^モ毛^{オノ}と見えたり、己^{オノ}々の意^{オノ}にて、俗^{オノ}に面^{メシク}々と云^{オノ}に同じ、又按^アに、向^{オノ}は、もしは面^{メシク}の誤^{オノ}にて、各^{オノ}面^{オノ}各^{オノ}面^{オノ}と云意^{オノ}に、各々面々とかけるか、さらば古事記に、許^コ袁^ヲ呂^ロ許^コ袁^ヲ呂^ロを、許々袁々呂々と書る類とすべし

(鹿持雅澄『古義』)

『古義』が論拠としているのは、『続日本紀』卷二十六の称徳天皇の宣命の「於^{オノ}乃^モ毛^{オノ}貞^モかに能く淨き心を以て奉仕^シれ」(第三十三詔、天平神護元(七六五)年三月条)である。この「於^{オノ}乃^モ毛^{オノ}於^{オノ}乃^モ毛^{オノ}」は、『古義』が「俗^{メシク}に面^{メシク}々と云に同じ」と言うように、「おのおの」や「めいめい」といった意味で解釈できる。川田順『總釋』(一九三六年)も、『古義』を参考にして「おのおのも」を採ったと考えられる。

「おのおのも」は、七音句にあつて六音である。字足らず句は、記紀歌謡や人麻呂以前には散見するが、福麻呂の頃には特殊な場合を除き減少している。垣見修司が「金村、福麻呂、池主は字足らず句をあまり用いない」と言うように、福麻呂は五七の定型を守る傾向にあつたと考えられる。また、『古義』は「向^{オノ}は、もしは面^{メシク}の誤^{オノ}」と言ひ、「向^{オノ}」の字が「面」を誤ったものではないかとしたが、『校本萬葉集』⁽¹⁹⁾の限りではいずれの写本にも異同は見えない。

最も多くの注釈書が採る「おのがむきむき」は、元暦校本をはじめ、次点本、新点本でも広く採られてきた訓である。⁽²⁰⁾近年の注釈書もこの訓を採る。『全釋』は根拠を以下のように述べている。

舊訓を改めて、代匠記精撰本「おのおのと讀むべきにや」とあり、古義はオノモオノモとよんでゐるが、これは祝詞大殿祭に己^{オノ}乖^{オノ}乖^{オノ}不^{オノ}令^{オノ}在^{オノ}とあつて、オノガムキムキといふ成語と思はれるから、さう訓むことにする。

(鴻巣盛広『全釋』、一九三二年)

『全釋』は、「おのがむきむき」は祝詞に見える成語であるとする。『延喜式』卷八の祝詞「大殿祭」に、「親王・諸王・諸臣・百の官人等を、己乖々不令在、耶しき意・穢き心なく、宮進め進めして、宮勤め勤めしめて」とあることによる。

『代匠記』は、初稿本でも精撰本でも、本文では従来の通りに「おのがむきむき」の訓を採るが、一方で、精撰本に次のような注が見える。

各々モ、下ノ向々ノ點ニ准ゼバ、オノノト讀ベキニヤ

(契沖『代匠記』精撰本)

「向々」を「むきむき」と訓むならば、「各々」もまた「おのおの」と訓むべきではないかという一案である。

『代匠記』精撰本の提示した訓「おのおのむきむき」は八音であるが、句中に単独の母音音節が含まれるので、字余りは問題にならない。また、福麻呂歌集歌において、同じ文字の繰り返しは、他に「布当山々並見者」(6一〇五五)、⁽¹⁹⁾「中々二辞緒下延」(9一七九二)があり、いずれも同じ音の繰り返しである。この二例に従えば、「各々」もまた「おのおの」と訓むための表記であると考えられよう。

「おのがむきむき」と「おのおのむきむき」は、どちらも「個々が異なる方向を向き」の意と解釈できる。

しかし、「おのが」が『萬葉集』に十九例見られるのに対し、「おのおの」は『萬葉集』には例がなく、記紀にも見えない。⁽²²⁾『萬葉集』中に「おのおの」の例はなく、「おのが」の例はあることを踏まえ、「おのがむきむき」の訓を採ることにする。

(2) 「はふ鳶の別れ」と「はふ鳶の己が向き向き」

前節では、「蔓都多乃^{はふつたの} 各々向々^{おのがむきむき}」の七音句「各々向々」の訓を検討し、「おのがむきむき」を採ることを述べた。

以下、当該歌の枕詞について、具体的に検討する。

「はふ蔦の己が向き向き 天雲の別れし行けば」は、一見、「はふ蔦の己が向き向き」で一連の句、「天雲の別れし行けば」で一連の句という構造を持つ。しかし、「はふ蔦の己が向き向き」と「天雲の別れし行けば」は、どちらも、「別れ」を示唆する表現であり、ある種の対応する関係にある。

『萬葉集』において、当該歌を除く「はふ蔦の」はすべて「別る」を導く。当該歌以外の全四例を掲出する。

- ① ……深海松の深めて思へど さ寝し夜はいくだもあらず はふつたの 延都多乃別れし来れば 肝向かふ心を痛み……
(2一三五・相聞 柿本人麻呂「柿本朝臣人麻呂從石見国別妻上来時歌」)
- ② ……旅なれば君か偲はむ 言はむすべせむすべ知らず はふつたの 〈或書有「あしひきの山の木末に」句也〉 延津田乃行きの〈或本無「行きの」句也〉別れのあまた惜しきものかも
(13三二九一・相聞)
- ③ ……玉くしげ二上山に はふつたの 波布都多能行きは別れず あり通ひいや年のはに 思ふどちかくし遊ばむ 今も見ると
(17三九九一 大伴家持「遊覽布勢水海賦」)
- ④ ……ますらをの引きのまにまに しなざかる越路をさして はふつたの 波布都多能別れにしより……
(19四二二〇 大伴坂上郎女「從京師來贈歌」)

右のように、「はふ蔦の」は、当該歌以外の四例では、①④のように「別れし来れば」、「別れにしより」の前、または②③のように「行きの別れ」、「行きは別れず」の前にある。これらの用例を見ると、「はふ蔦の」は、「別れ」、「別る」を導く枕詞であったと考えられる。

しかし、当該歌では、「はふ蔦の―別れ」ではなく「はふ蔦の―己が向き向き」と置き、その後に「天雲の―別れし行けば」と続いている。「はふ蔦の別れし行けば」と詠まず、「はふ蔦の己が向き向き 天雲の別れし行けば」と詠んだ

のは、何か意図があつてのことであると考えられる。

当該歌を含む『萬葉集』に残る五例から推測する限り、年代の明確な最初の用例は①の人麻呂の石見相聞歌の第二群長歌である。「はふ蔦の別れ」は、人麻呂に始まる表現であつたと考えられる。②③④の「はふ蔦の別れ」、そして当該歌の「はふ蔦の己が向き向き」も、①の石見相聞歌を踏まえた上での表現であらう。

定型表現であつた「はふ蔦の別れ」と当該歌の「はふ蔦の己が向き向き」の関連について、『代匠記』と『金子評釋』は次のように言及している。

人麻呂の、石見より上らるゝ時の歌に、はふつたのわかれしくればとあるにおなじ。つたのとはひとつなるが、末はこなたかなたへはひわかるゝにたとへて、をのがむきくといへり。

(契沖『代匠記』初稿本)

はふつたの「おのがむきむき」に係る枕詞。卷二には「別れ」の枕詞に用ゐた例がある。蔦は先から先へ枝をさして分岐してゆくので、おのが向きくゝでもあり、別れでもある。

(金子元臣『金子評釋』、一九四五年)

当該歌の「はふ蔦の己が向き向き」も、石見相聞歌の「はふ蔦の別れ」と同様に、蔦が枝分かれする様子を表すといふ。その他の注釈書においても、「はふ蔦」が「己が向き向き」にかかるのは、蔦が枝分かれするからであるという解釈で一致する。⁽²³⁾

「つた」は、当該歌を含む『萬葉集』の「はふつたの」五例を除いて、記紀、『萬葉集』に他に例がない。明確に種類を特定できる用例はないが、②の「或書」の異伝に「あしひきの山の木末にはふ蔦の」とあるところから、「つた」は山の木の梢に這うものであつたことが確認できる。蔓性の植物であることは疑いがないだらう。諸注の言うように、「は

ふ蔦の」が「別れ」と「己が向き向き」の前に置かれるのは、「つた」の枝が分岐して伸びるからであると考えられる。以上のように、当該歌の「はふ蔦の己が向き向き」は、先行する「はふ蔦の別れ」という表現を意識して用いたものである。しかし、当該歌では、あえて「はふ蔦の己が向き向き」と詠んでいることから、定型化した枕詞「はふ蔦の」であっても、蔦の枝が二つに分かれるから、「はふ蔦の」は「別れ」を導く枕詞であると理解して自分の歌に用いるという作歌意識がうかがえる。

そして、この「はふ蔦の己が向き向き」の下には「天雲の別れし行けば」が続く。「はふ蔦の己が向き向き」と「天雲の別れし行けば」という、いずれも「別れ」に関連する詞句を繰り返したのはなぜだろうか。

三、「天雲乃^{あまぐもの} 別石往者^{わかれしゆけば}」について

(1) 諸注の解釈

本章では、第十七・十八句「天雲乃^{あまぐもの} 別石往者^{わかれしゆけば}」について検討する。

当該歌の「天雲の」について詳しく触れている従来の注釈書は少ない。次に掲出する十二の注釈書は、当該歌の「天雲の」を歌意に影響を与えない枕詞、または特に語釈の必要のないものとして理解していると考えられる。

「天雲の」に対する語釈に「枕詞」とあり、詳しい説明がないもの

『代匠記』初稿本・精撰本、『古義』、『全釋』、『總釋』、『私注』、『註釋』、『集成』、『全注』

「天雲の」に対する語釈がなく、歌本文において「天雲の」を（ ）で括るもの

『井上新考』

「天雲の」に対する語釈がなく、現代語訳においても「天雲の」を反映していないもの

『佐佐木評釋』、『大系』

「天雲の」に対する語釈がなく、現代語訳において「天雲の」を（ ）で括るもの

『新編全集』

次の四つの注釈書は、前に挙げた注釈書とは異なり、「天雲の」を字句に掛かる比喩と解釈しているが、その具体的な内容は書かれていない。

『拾穂抄』——『諷詞』

『萬葉考』——「如くを入れて心得べし」

『略解』——「天雲ノ如クと言ふを略けり」

『全訳注』——「次句の形容」

これらの注釈書は、「天雲の」を比喩表現として捉えている点で、前に挙げた十二の注釈書とは異なる。しかし、具體的な言及はされていないので、各注の筆者が「天雲の」を「別れし行けば」のどのような比喩であると考えていたのかは不明である。

次に挙げる八つの注釈書は、「天雲の別れし行けば」の具体的なイメージを提示している。これらの注釈書の解釈は、以下のAからDの四種類に分類することができる。

A 天雲が分かれる様子 『金子評釋』、『窪田評釋』、『全註釋』、『和歌文学大系』、『全歌講義』

B 天雲が近づきがたく見える様子 『釋注』

C 天雲が遠く離れて行く様子 『全解』

D 天雲が頼りなく動く様子 『岩波文庫』

このうち、当該歌の「天雲の別れし行けば」の解釈としてはAまたはCが適切であると考えられる。Bは「天雲の外のみ見つ」(4五四六、笠金村)、Dは「天雲のゆくらゆくらに」²⁴(13三三七二)といった、『萬葉集』中に見える「天雲の」をもとに、当該歌の「天雲の」を理解する。しかし、B Dの依拠するこれらの例を当該歌に適用することは、七音句「別れし行けば」との関連が明確ではなく従いがたい。

以上のように、当該歌の「天雲の」は、多くの注釈書では、歌意に影響を与えない枕詞、または語釈不要のものと見做されている。一部の注釈書は「天雲の」を比喻として解釈するが、比喻の内容は説明されていない。比喻のイメージを明示している注釈書の中でも解釈は一定でない。「天雲の別れし行けば」の解釈として適当であるのは、最も多くの注釈書が採るA「天雲が分かれる様子」または、『全解』が採るC「天雲が遠く離れて行く様子」であると考えられる。次節では、『萬葉集』における「わかる」という語の用法を整理し、七音句「別れし行けば」について検討する。

(2) 『萬葉集』の「わかる」

前節で確認したように、当該歌の「天雲の」について、「天雲が分裂する」ので「別れ」にかかる枕詞になると考える注釈書は多い。

雲は集まつても分散するので、「別れ」に係けた枕詞。

(金子元臣『金子評釋』、一九四五年)

「天雲の」は、ちりぢりになる意で、「別れ」の枕詞。

(窪田空穂『窪田評釋』、一九五〇年)

枕詞。天の雲が、それぞれに別れるというので、別れに冠している。

(武田祐吉『全註釋』、一九五六年)

枕詞。天雲が別れ別れになるように、の意で「別れ」に冠する。

(稲岡耕二『和歌文学大系』、二〇〇二年)

(注)「別れ」にかかる枕詞。(現代語訳) 空の雲が離れ離れになるように別れて行ったので

(阿蘇瑞枝『全歌講義』、二〇〇九年)

これらは、「別れし行けば」の「わかる」を「二つに分かれる」の意と解したことによる解釈である。次に挙げる⑤は、「二つに分かれる」という意味の「わかる」の用例である。

⑤ 妹も我も一つなれかも 三河なる二見の道ゆ別不勝鶴わかれかねづ

(三二七六・雑歌 高市黒人「高市黒人羈旅歌」)

右の歌は、女性と自分が二つの道に分かれたいことを歌う。また、「はふ薦のわかれ」や、天と地が分かれた時以來という意味の表現である「天地の分時従」(三三一七、山部赤人)、「天地の別時由」(八一五二〇、山上憶良)、「天地と別之時従」(10二〇〇五、10二〇九二)の「わかる」も、一つであつたものが分かれる例であろう。

「二つに分かれる」は、「わかる」という語の基本的な語義であると考えられる。

しかし、『萬葉集』中には、「わかる」と「行く」を合わせた表現で、「主格が元いた場所を後に置いて離れて行く」と解釈できる例が認められる。

⑥ ……難波渇御津の崎より 大船にま梶しじ貫き 白波の高き荒海を 島伝ひ伊別往者 留まれる我は幣引き
斎ひつつ君をば待たむ 早帰りませ

⑦ 百隈の道は来にしを また更に八十島過ぎて和加例加由可牟わかれかゆかむ
(八一四五三・雑歌 笠金村「天平五年癸酉春閏三月、笠金村贈入唐使歌」)

(20四三四九 刑部三野)

⑧は遣唐使に贈られた歌である。「島伝ひい別れ行かば」の主格は遣唐使一行であり、都に「留まれる我」は動かない。

⑦は上総国の防人の歌で、これも「別れか行かむ」の主格は、上総国から任地への道を行く防人である。こちらにも、故郷は動いていない。二つの方向に分かれるということよりも、主格である一人、または集団が離れて行くことを強調した表現である。

このような例を踏まえると、当該歌の「天雲の別れし行けば」は、雲が二つに分かれる、自分と弟が二つに分かれることを表しているとは断定できない。雲が離れて行く、死んだ弟が自分の元を離れて行くという表現とも考えられる。後者をとる注釈書は、『全解』のみである。

枕詞。天雲が遠く離れて行くところから、「別れし行けば」に接続。

(多田一臣『全解』、二〇〇九年)

「別れ行く」という語の用法を踏まえれば、『全解』の説も検討される必要がある。

(3) 『萬葉集』の「雲」

前節では、「別れし行けば」の「わかる」の意味について検討し、「二つに分かれる」と「離れて行く」という二つの可能性が考えられることを述べた。本節では、『萬葉集』において「雲」がどのように詠まれていたのかを見てゆき、『萬葉集』の雲の表現として、どちらがより適切であるか検討する。

『萬葉集』中、「雲」の用例は二〇〇例を超える。約二〇〇例の中で、分裂する雲は、二首三例しか確認できない。珍しい表現であったと言えよう。

- ⑧ ……天雲之八重あまぐものかやへくもわけ揺別而あまぐものかやへくもわけへ二云、天雲之八重あまぐものかやへくもわけ雲別而あまぐものかやへくもわけ 神下しいませまつりし 高照らす日の皇子は……

(二一六七・挽歌 柿本人麻呂「日並皇子尊殯宮之時柿本人麻呂作歌」)

⑨ ……之良久母能知辺乎於之和氣 しらくものちへをおしわけ 天そそり高き立山 冬夏と別くこともなく 白たへに雪は降り置きて……

(17四〇〇三 大伴池主「敬和立山賦」)

どちらの雲も、⑧は「神下しいませまつりし」からわかるように天上の神によって、⑨は「天そそり高き立山」、非常に高い山という特殊な他者によって分けられている。また、⑧「かきわく」、⑨「おしわく」が他動詞であるのに対し、当該歌の「天雲の別れし行けば」の「わかる」は自動詞であることも注意されよう。⑧⑨のような例は、当該歌の「天雲の別れし行けば」とは異なる表現であると考えられる。

独りでに分裂する雲は、『萬葉集』には例がない。したがって、「天雲の別れし行けば」を「天雲が二つに分かれるように別れて行ったので」と解釈するのは難しい。

一方、空を彼方まで流れて行く雲は、『萬葉集』に多くの例を見ることができる。

次の二例は、「天雲」の例である。

⑩ ……いづくにか君がまさむと あまのゆきのまにに 天雲乃行之随尔 射ゆ鹿猪の行きも死なむと 思へども道の知らねば……

⑪ 天雲乃去還奈牟毛能由恵尔 あまのゆきかへりなむものゆゑに 思ひそ我がする 別れ悲しみ

(19四二四二 藤原仲麻呂「大納言藤原家餞之入唐使等宴日歌」)

⑩は挽歌で、亡くなった男性を探すためならどこまでも行くことができるという表現として、「天雲の行きの随に」を用いる。「天雲の行きの随に」は、「天雲が行くのに従って」と解される。⑪は、遣唐使に贈られた歌である。唐へ向かう遣唐使を「天雲」に擬す。⑩は死者のいる場所、⑪は唐の国、いずれも果てしなく遠い場所へ行くことの比喩として、流れて行く「天雲」が機能している。

(13三三四四・挽歌)

この他にも、『萬葉集』には、行く雲を詠む歌が見える。次に掲出するのは、人間がすぐに行くことが叶わない遠い距離も飛び越えて行く雲の用例である。

⑫ みそらゆくもにもがも 水空往雲尔毛欲成 高飛ぶ鳥にもがも 明日行きて妹に言問ひ…… (4五三四・相聞 安貴王)

⑬ かぜははたののこにきよへども 風雲者二岸尔可欲倍杼母 我が遠妻の言そ通はぬ (8一五二一・秋雜歌 山上憶良)

⑭ あまふくもにありてしか ひさかたの天飛雲尔在而然 君を相見む おつる日なしに (11二六七六・寄物陳思)

⑮ 国遠み思ひなわびそ 風のむた雲之行如言は通はむ (12三一七八・羈旅発思)

⑯ みそらゆくもにもがも 美蘇良由久君母尔毛我母奈 今日行きて妹に言問ひ明日帰り来む (14三五一〇・相聞 東歌)

⑰ ……あしひきの山川隔り 風雲尔言者雖通 直に逢はず日の重なれば……

(19四二二四 大伴家持「挽歌」)

⑱ みそらゆくももつかひと 美蘇良由久母々都可比等人は言へど 家づと遣らむたづき知らずも

(20四四一〇 大伴家持「陳防人悲別情歌」)

たとえば⑫は、「み空行く雲」や「高飛ぶ鳥」であれば、明日行つて妹と語らうことができるのに歌う。⑫の長歌冒頭「遠妻」とあること、左注に因幡八上采女が因幡国に帰された(「退却本郷」焉)時に安貴王が作った歌であるところから、地理的な隔たりがわかる。「み空行く雲にもがも」は、自分が雲であつたならば、次の日に因幡までの距離を行くことができるのという実現不可能な願いの表現である。

以上のように、『萬葉集』には、独りでに分裂する雲は例がなく、遠くへ流れて行く雲は例が多い。「白真弓いま春山に去雲之逝哉將別恋しきものを」(10一九二三・春相聞「寄雲」)のような雲も、山の上を越え、遠くへ流れて行く雲ではないだろうか。当該歌の「天雲の別れし行けば」の「天雲の」もまた、雲が分裂するので「別れ」に掛かる枕詞にな

(4) 福麻呂歌の「雲」——「天雲乃退部乃限」——

最後に、当該歌の作者である福麻呂の「雲」の用例を見てみたい。『萬葉集』に採録されている歌を見る限りでは、福麻呂は、「雲」を含む語の中で「天雲」のみを使用している。⁽²⁶⁾

- ⑬ ……玉梓の道の辺近く 岩構へ作れる塚を 天雲乃退部乃限 この道を行く人ごとに 行き寄りてい立ち嘆かう。⁽²⁶⁾
ひ……

右に挙げた⑬は、福麻呂歌集「過葦屋処女墓時作歌」の一部である。葦屋の菟原処女の墓を訪れた際の歌であるとい

う。
この「天雲乃退部乃限」も、「天雲の遠く行く果てまで」の意であると考えられる。「天雲乃退部乃限」の類句は、歌謡にも見える。⁽²⁷⁾

- ⑭ 大和へに西風吹き上げて 玖毛婆那礼 曾岐袁理登母 我忘れめや⁽²⁸⁾

(『古事記』下巻・歌謡番号五五 黒日売)

⑭は、吉備から大和へ帰る仁徳天皇に黒日売が贈った別れの歌である。歌意は、「大和の方に西風が吹き上げて、雲が離れるように、遠くに行ってしまっても、私はあなたを忘れましようか」と解釈できる。

この「そきをり」は、四段動詞「そく」の連用形「そき」、状態の継続持続を表す補助動詞の「をり」という構造を持っている。福麻呂歌の「あまくものそきへのきはみ」とは、「雲」と動詞「そく」が共通している。

この歌謡の「くもばなれ」は、土橋寛の「雲が自分のいる所から、大和のほうへ離れて行くこと」とする解釈に従う。

しかし、「雲が散散に離れる意」とする解釈もあるため、用例を確認しておく。「くもばなれ」は、『萬葉集』にも一例がある。

②① ……秋萩の散らへる野辺の 初尾花飯廬にふきて 久毛婆奈礼遠き国辺の 露霜の寒き山辺に 宿りせるらむ

(15 三六九一 葛井子老)

「くもばなれ遠き国辺」は、「雲が散り散りに離れるように遠い場所」では意味が通りにくい。少なくとも、萬葉第四期初期の②①の作者は、故郷から離れて遠い場所に来たことを、流れる雲に重ね合わせて、「くもばなれ」を用いたと考えられる。萬葉第四期の歌である②①は、歌謡である②②の「くもばなれ」の原義の解釈には有効ではないかもしれないが、福麻呂と同時代の「くもばなれ」の解釈としては参考になろう。

福麻呂歌の①⑨「天雲乃退部乃限」について、『代匠記』は以下のように述べる。

そきはさかるといふにおなじ心なり。退の字をそくとよむは、しりへにそくにて、しりへのかたへ遠さかるなり。されば天雲のそきへのかぎりは、天雲の遠さかり行かぎりなり。

(契沖『代匠記』初稿本、①⑨注)

『代匠記』は、用字「退」から「天雲乃退部乃限」の意味を考え、「天雲が遠ざかつて行く果て」であると解釈している。

福麻呂歌の歌中の「退」には、他に「国尔退而」(9 一八〇〇、福麻呂歌集)の一例がある。『萬葉集』において、歌中の「退」は、通常「まかる」と訓まれる。福麻呂の①⑨「そく」は唯一の異例である。『時代別国語大辞典上代編』によれば、「まかる」には、「①退出する。辞去する」、「②遠い彼方へ去る。行ってしまう」、「③死ぬ」といった意味がある。福麻呂歌の「国に退る」は、「退出する。辞去する」、また「遠い彼方へ去る」という意味で用いられていると考え

られる。このような「退」は、他にも「天離る夷部^{ひなへに}尔退^{はた}」（61019、石上乙麻呂）や「食す国の遠の朝廷に汝等が如^{かく}是^は退去者^{ぼりなば}」（6973、聖武天皇）といった例がある。これらの用例を見ると、『代匠記』が「退の字をそくとよむは、しりへにそくて、しりへのかたへ遠ざかるなり」と考えたのは適切な理解であると考えられる。

前節の雲の用例も踏まえると、空を流れる雲に、遠い場所へ行く人を重ね合わせることは、歌謡から例があり、萬葉歌にも例が多い。福麻呂歌にも「天雲^{あまぐも}乃退部^{のぼり}乃限^{のきま}」の用例がある。当該歌の「天雲の別れし行けば」も、空を流れて行く雲に黄泉の国へ去った弟を重ねていると解釈するのが自然であると考えられる。

「天雲の」は、先に検討した「はふ蔦」とは異なる別れの比喻表現である。地を這い、やがて岩や木に絡み付き、様々な方向に枝分かれしながら延びて行く蔦には、異なる方向に分かれてしまった、死んだ弟と生きている自分が重ねられている。そして、遙か頭上を流れて行く雲には、自分を置いて黄泉の国へ行ってしまった二度と帰ることのない弟が重ねられている。

作者にとって、人麻呂以来の「はふ蔦の別れ」も、「天雲の別れ」も、形骸化した一様式ではなく、鮮やかなイメージを伴った表現であったのではないか。「這う蔦の（分かれる）ように（自分と弟は）それぞれ別々の方を向き、天雲の（遠くへ行く）ように（弟が）別れて行くので」という表現には、共に育った弟と道を分かれたれ、後に残された兄のかなしみが込められているのではないだろうか。

永遠の別れを経験した作者は、「はふ蔦の別れし行けば」ではなく、「はふ蔦の己が向き向き 天雲の別れし行けば」と詠むことで、可能な限り言葉を尽くして「別れる」ということを表現しようとしたのではないだろうか。この歌には、「はふ蔦の」「天雲の」という枕詞が必要だったのである。

おわりに

以上、福麻呂歌集歌「哀弟死去作歌」長歌の「はふ蔦の己が向き向き 天雲の別れし行けば」を検討し、枕詞が歌意に関わる可能性、さらには比喩としての側面について考えてきた。

従来、当該歌の枕詞は、その装飾性のみに焦点が当てられ、歌意に影響を与えない枕詞であると考えられることが多かった。しかし、「はふ蔦の」は枝分かれする蔦、「天雲の」は流れて行く雲であり、それぞれ異なるイメージを持って、離別の比喩として機能している。これらの枕詞は、装飾性や固定された用法を重視したものではない。後続の七音句の比喩として歌意に積極的に関わるものであり、その効果を意識して作者が選んだ表現であると考えられる。

澤瀉久孝は、人麻呂が、独自の新しい用法で記紀歌謡以来の枕詞を用いたことについて、「古語の先例に拘らず、常に讀者に親しみやすい解釈と表現とを試みようとした人麻呂の獨自性をそこに見るべきではなからうか」と述べた。福麻呂の当該歌の枕詞も、人麻呂の枕詞のように見つめ直すことはできないだろうか。福麻呂は、人麻呂以来の「はふ蔦の」も、「はふ蔦の」の対として用いた「天雲の」も、型通りに模倣して用いたわけではない。福麻呂が自身の解釈を加えた上で用いたものであると考えられる。そしてそれは、決して独りよがりな解釈ではなく、同時代の人々が十分に読解し得るものであったのではないだろうか。

「哀弟死去作歌」には、まだ多くの課題が残されている。本稿では取り上げることができなかった、当該歌の他の枕詞も、装飾機能としてだけではなく、表現上、何らかの意図を担って用いられたものであると考えられる。人麻呂の枕詞を歌意に反映させて解釈するように、福麻呂の枕詞にも、さらなる可能性が見出されて良いのではないだろうか。

注

- (1) 『萬葉集』本文および訓は、原則として『岩波文庫』により、句切れの位置は稿者が判断した。「哀弟死去作歌」(9一八〇四～一八〇六)の本文校訂には、佐佐木信綱編輯代表『校本萬葉集』六(岩波書店、一九三一年)、佐竹昭広・木下正俊・神堀忍・工藤力男編『校本萬葉集』十四(新增補版)(岩波書店、一九八一年)、廣瀬捨三・佐竹昭広・木下正俊・神堀忍・工藤力男編『校本萬葉集』別冊二(岩波書店、一九九四年)を用いた。
- (2) アラビア数字は『萬葉集』巻名、漢数字は歌番号である。『萬葉集』の歌番号は旧国歌大観番号を用いた。
- (3) 『萬葉集』に「田辺福麻呂之歌集」(田辺福麻呂歌集)所出と左注にある歌は、福麻呂の自作であるという通説に従う。
- (4) 福麻呂が橘諸兄の近臣であり、その立場が福麻呂の作歌活動に反映されているであろうことについては、橋本達雄「田辺福麻呂―橘諸兄との関連―」(『万葉宮廷歌人の研究』笠間書院、一九七五年／初出:『萬葉』62、一九六七年一月)をはじめとする論考に詳しい。
- (5) 井上光貞・席晃・土田直鎮・青木和夫校注『律令』(日本思想大系・岩波書店、一九七六年)一五二ページ。
- (6) 時代区分は、澤瀉久孝・森本治吉『作者類別年代順 萬葉集』(藝林舎、一九三二年)による。
- (7) 歌数は、大久間喜一郎・森敦司・針原孝之編集『万葉集歌人事典』(雄山閣、一九八二年)による。福麻呂作の四十四首は、巻十八の十三首(四〇三二～四〇三六、四〇三八～四〇四二、四〇四六、四〇四九、四〇五二)および、「田辺福麻呂歌集」所出の巻六の二十一首(一〇四七～一〇六七)、巻九の十首(一七九二～一七九四、一八〇〇～一八〇六)。萬葉第四期で歌数の多い上位五歌人は、大伴家持(長歌四十六首、短歌四百三十一首、連歌一首、計四百七十九首)、田辺福麻呂(長歌十首、短歌三十四、計四十四首)、中臣宅守(短歌四十首)、笠女郎(短歌二十九首)、大伴池主(長歌四首、短歌二十四首、計二十八首)である。
- (8) 大久間喜一郎・森敦司・針原孝之編集『万葉集歌人事典』(雄山閣、一九八二年)。
- (9) 横山英「万葉集の用字に関する一考察」(『萬葉私考』)さるびあ出版、一九六六年／初出:『京都帝國大學文學會二十五周年記念論文集』、一九三四年十一月)、古屋彰「田辺福麻呂の用字」(『万葉集の表記と文字』和泉書院、一九

九八年／初出：『萬葉』45、一九六二年十月、『國語研究』2、一九六四年）、奥村和美「田辺福麻呂歌集歌の用字と表現」〔叙説〕38、二〇一一年三月）など。

(10) 佐野正巳「田辺福麻呂論」〔『萬葉集作歌と風土』桜楓社、一九六三年）、藤原芳男「田辺福麻呂の儀礼歌の側面」〔『萬葉集研究 第十集』塙書房、一九八一年）、花井しおり「田辺福麻呂の修辭」〔叙説〕33、二〇〇六年三月）、安國宏紀「田辺福麻呂の長対表現―その環境と時代性―」〔『日本文学文化』10、二〇一〇年二月）など。

(11) 「悲寧樂故郷作歌」(一〇四七―一〇四九)、「讀久迓新京歌」(一〇五〇―一〇五八)、「春日悲傷三香原荒墟作歌」(一〇五九―一〇六一)、「難波宮作歌」(一〇六二―一〇六七)。

(12) 「哀弟死去作歌」に関する先行論文は、民俗学的な視点から作品を論じた、今井優「弟の死にけるを哀しびて作る歌」(神野志隆光・坂本信幸編集『セミナー萬葉の歌人と作品 第六卷』和泉書院、二〇〇〇年)のみである。

(13) 長歌前半部の「答向」〔朝露乃〕、「葦原乃」も、枕詞であると考えられている。当該歌は、福麻呂歌の中でも特に枕詞の割合の多い歌である。

(14) 『私注』は、土屋文明『萬葉集私注 新訂版』(筑摩書房、一九七六―一九七七年)を指す。本稿で引用する『萬葉集』の注釈書の略称、使用底本を以下に提示する。『代匠記』、『拾穂抄』を引用する場合には適宜濁点を加えた。『代匠記』……久松潜一校訂『萬葉代匠記』(契沖全集・岩波書店、一九七三―一九七五年)、『拾穂抄』……古典索引刊行会編『萬葉拾穂抄 影印・翻刻』(塙書房、二〇〇二年)、『萬葉考』……久松潜一監修『萬葉考』(賀茂真淵全集・続群書類従完成会、一九七七―一九八五年)、『略解』……与謝野寛・正宗敦夫・与謝野晶子編『萬葉集略解』(日本古典全集、一九二五―一九二七年)、『古義』……山田安栄編『萬葉集古義』(国書刊行会、一九二―一九一四年)、『井上新考』……井上通泰『萬葉集新考』(『井上通泰上代関係著作集』秀英書房、一九八六年)、『全釋』……鴻巣盛広『萬葉集全釋』(秀英書房、一九八七年)、『總釋』……川田順ほか『萬葉集總釋』(楽浪書院、一九三五―一九三七年)、『金子評釋』……金子元臣『萬葉集評釋』(明治書院、一九三五―一九四五年)、『窪田評釋』……窪田空穂『萬葉集評釋』(東京堂出版、一九八四―一九八五年)、『佐佐木評釋』……佐佐木信綱『評釋萬葉集』(六興出版社、一九四八―一九五四年)、『全註釋』

- ……武田祐吉『増訂 萬葉集全註釋』（角川書店、一九五六～一九五七年）、『大系』……高木市之助・五味智英・大野晋『萬葉集』（古典文学大系・岩波書店、一九五七～一九六二年）、『注釋』……澤瀉久孝『萬葉集注釋』（中央公論社、一九五七～一九六八年）、『私注』……土屋文明『萬葉集私注 新訂版』（筑摩書房、一九七六～一九七七年）、『集成』……青木生子・井手至・伊藤博・清水克彦・橋本四郎『萬葉集』（新潮日本古典集成・新潮社、一九七六～一九八四年）、『全訳注』……中西進『万葉集 全訳注原文付』（講談社文庫・講談社、一九七八～一九八三年）、『全注』……金井清一ほか『萬葉集全注』（有斐閣、一九八三年刊行中）、『新編全集』……小島憲之・木下正俊・東野治之『萬葉集』（新編日本古典文学全集・小学館、一九九四～一九九六年）、『釋注』……伊藤博『萬葉集釋注』（集英社、一九九五～二〇〇〇年）、『和歌文学大系』……稲岡耕二『萬葉集』（和歌文学大系・明治書院、一九九七～二〇一五年）、『全歌講義』……阿蘇瑞枝『萬葉集全歌講義』（笠間書院、二〇〇六～二〇一五年）、『全解』……多田一臣『万葉集全解』（筑摩書房、二〇〇九年）、『岩波文庫』……佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之『万葉集』（岩波文庫・岩波書店、二〇一三～二〇一五年）
- (15) 犬養廉・井上宗雄・大久保正他編『和歌大辞典』（明治書院、一九八六年）。
- (16) 「蔓都多乃」は、『萬葉集』中の仮名書例「波布都多能」（17三九九一、19四二二〇）に従って、「はふつたの」と訓む。
- (17) 青木和夫・稲岡耕二・篠山晴生・白藤禮幸『続日本紀』四（新日本古典文学大系・岩波書店、一九九五年）七八ページ（原文）、七九ページ（読み下し文）。
- (18) 垣見修司「長歌の字足らず句―記紀歌謡から万葉へ―」（『万葉集卷十三の長歌文芸』和泉書院、二〇二一年／初出『叙説』37、二〇一〇年三月）二二一ページ。
- (19) 佐佐木信綱編輯代表『校本萬葉集』六（岩波書店、一九三二年）、佐竹昭広・木下正俊・神堀忍・工藤力男編『校本萬葉集』十四（新増補版）（岩波書店、一九八一年）、廣瀬捨三・佐竹昭広・木下正俊・神堀忍・工藤力男編『校本萬葉集』別冊二（岩波書店、一九九四年）。
- (20) 同前。

(21) 倉野憲司・武田祐吉校注『古事記・祝詞』（日本古典文学大系・岩波書店、一九五八年）四二〇ページ（原文）、四二二ページ（訓読文）。該当箇所「己乖々」は、古写本を見ると、現存最古写本の九条家本（『九条家本延喜式』東京国立博物館古典籍叢刊・思文閣、二〇一二）には「己乖ソナ」、武田祐吉旧蔵の卜部兼永筆本（國學院大學図書館デジタルライブラリー <http://https://opac.kokugakuin.ac.jp/library/lime/engisiki/pages/page027.html> : 二〇二五年二月十日閲覧）には「己乖カキキ」、卜部兼右筆本（國學院大學図書館デジタルライブラリー <http://https://opac.kokugakuin.ac.jp/library/lime/engisiki/pages/page029.html> : 二〇二五年二月十日閲覧）には「己乖カキキ」と書写されている。「乖」を「そむき」と訓んでいる、九条家本には「乖」の繰り返しがないなど、当該歌の「おのがむきむき」の根拠としては不審な点もある。

(22) 「各」は、「……各述懷作歌」（六九五七、題詞）などのように、一字でも（めいめい）、「それぞれ」といった意味がある。『萬葉集』中で、「各」を二字重ねるのは当該歌のみである。『玉台新詠』卷一「古詩 為焦仲卿妻作」には、仲卿と蘭芝が命を絶つ前の最後の別れの場面に、「執手分道去、各カキキ還家門。生人作死別、恨恨那可論」（内田泉之助『玉台新詠』（上）新釈漢文大系・明治書院、一九七四年、一二二ページ）の例が見え、このような漢籍の影響を受け、「おのが」を「各々」と表記した可能性も考えられる。

(23) 『拾穂抄』、『古義』、『全釋』、『窪田評釋』、『全註釋』、『新編全集』、『和歌文学大系』、『全注』、『全歌講義』、『全解』、『岩波文庫』の当該歌「はふ薦の」注による。

(24) 『岩波文庫』はおそらく、三三七二番歌の「天雲のゆくらくらに」の後に「葦垣の思ひ乱れて」が続くことから、当該歌にも同じく「葦垣の思ひ乱れて」の詞句が存在するため、当該歌の「天雲の」も三三七二番歌と同様の枕詞であると解釈したと考えられる。

(25) 『新編全集』は、四二四二番歌の作者について、「ここは天平勝宝元年（七四九）大納言に任ぜられた藤原朝臣仲麻呂をさすかという。しかしその兄の豊成もその前年に大納言になっており、大納言の定員が二人であることから、二人のうちの一方に決することは困難」とし、作者「大納言」は藤原仲麻呂、藤原豊成、どちらの可能性も考えられるという。

(26) 『萬葉集』の福麻呂作の四十四首中には、単語「雲」や、その他の複合語「白雲」「天雲」と同じく四音などの用例も確認できない。

(27) 『丹後国風土記』逸文にも、「大和へに風吹き上げて久母婆奈礼所企遠理等母与我を忘らすな（筒川の嶋子）・歌謡番号一三 神女」が見える。²⁰の『古事記』歌謡の言葉を所々替えたものであるのか、非常に類似している。『丹後国風土記』は成立年代が不明である。

(28) 記紀歌謡の本文および訓は、土橋寛・小西甚一校注『古代歌謡集』（日本古典文学大系・岩波書店、一九五七年）による。

(29) 「天雲乃退部限」は、「あまくものそきへのきはみ」と訓むと考えられる。「あまくものそく（き）へのきはみ」の用例は、『萬葉集』に他三例があり、萬葉第二期に「天雲乃曾久敝能極」（三四二〇）の例があるが、第三期末には「天雲乃曾伎敝能伎波美」（一九四二四七）の例がある。福麻呂と同時代の伴家持の歌にも、「山河乃曾伎敝乎登保美」（一七三九六四）の例があるため、第四期の福麻呂歌では「そきへ」であると考えられる。

(30) 土橋寛『古代歌謡全注釈 古事記編』（角川書店、一九七二年）。

(31) 相磯貞三『記紀歌謡全註解』（有精堂出版、一九六二年）。同著者『記紀歌謡新解』（厚生閣、一九三九年）にも、同じく「雲が散散に離れる意」とある。

(32) 上代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典上代編』（三省堂、一九六七年）。

(33) 澤瀉久孝「枕詞を通して見たる人麻呂の獨創性」（『萬葉の作品と時代』岩波書店、一九四一年）七二～七三ページ。